

東 海 の 古 代

第227号 2019年7月

会長 : 竹内 強 副会長・発行 : 林 伸禧
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

弥生時代の石硯

名古屋市 石田泉城

1 弥生時代の石硯と文字の使用

1998年に環濠集落の田和山遺跡（島根県松江市乃白町）で弥生中期ごろの地層から見つかった、石硯と墨をすりつぶすために使う研石の破片が、これまで最古級のものとされてきましたが、その後、北部九州を中心として弥生時代の砥石と考えられていた石片が見直され、石硯と再鑑定されています。

本年2月には、佐賀県唐津市の中原遺跡から出土の石片が前2世紀末～前1世紀ごろの石硯の一部、また、福岡県糸島市の潤地頭給遺跡から出土の石片が前2世紀末の石硯の一部であると再鑑定され、さらに同年3月には佐賀県教育委員会から吉野ヶ里遺跡において弥生時代のものとみられる石硯と研石が出土したとの発表がありました。北部九州において出土したこれらの石硯について、およそ古い順に並べると次のとおりです。

- ・潤地頭給遺跡（福岡県糸島市）＝前2世紀末、硯の石片
- ・中原遺跡（佐賀県唐津市）＝前2世紀末～前1世紀、硯の石片
- ・東小田峯遺跡（福岡県筑前町）＝前1世紀、研石の未製品
- ・中原遺跡（福岡県筑前町）＝後1世紀、硯の石片
- ・薬師ノ上遺跡（福岡県筑前町）＝後1世紀、硯の石片
- ・三雲・井原遺跡（福岡県糸島市）＝後1世紀～2世紀、硯の石片
- ・吉野ヶ里遺跡（佐賀県神埼郡ほか）＝3世紀か、石硯と研石の各石片
- ・西新町遺跡（福岡市早良区）＝3世紀半ば～後半、硯の石片
- ・比恵遺跡群（福岡市博多区）＝3世紀後半、硯の石片

これらの石硯の発見が間違いないものであれば、紀元前から既に国内で文字が普及していた可能性が高まります。これまで考えられてきた文字文化の発祥が3世紀とするならば、400年は遡ることになり、この点でたいへん重要なことだと思います。

2 弥生時代の石硯は実用品

本来であれば、田和山遺跡（島根県松江市）から前2世紀末の石硯が発見された時点で、倭の文字文化が紀元前から始まっていたと大々的に発表されなければならなかったはずで

す。ところが近畿からは弥生時代の石硯が出土せず近畿一元主義の考古学者から積極的な意見が無かったためでしょうか、日本の文字文化を大きく遡らせる大発見が衝撃的なニュースにならなかったようです。

田和山遺跡（松江市）の石硯は、玉造りの拠点となった潤地頭給遺跡（福岡県糸島市）などと同じ製作時期であり、田和山遺跡の破片も鑑定した西谷正九州大名誉教授（考古学、1938年～）は、田和山遺跡では、「楽浪系土器が出土しておらず、すずりは実用品ではなく宝物として扱われた可能性」があり、「先進文化に触れる窓口だった伊都国に入ったものが、山陰地方との交流で移譲されたのではないか」との見解を示しています。ただし、この発言には重要な事実誤認があります。

楽浪系土器は、壱岐や糸島に多く見られ、福岡、対馬からも出土し、本州での出土は少ない状況の中で、宍道湖の東にある田和山遺跡からは、黒灰色の色をした楽浪の土器（灰陶）が出土し、宍道湖の西にある山持遺跡（前1世紀～後1世紀）からも楽浪系土器が出土しています。さらに、田和山遺跡では、石硯とともに墨をする為の研石も出土していますので、たんなる威信財ではなく実用的なものと考えべきでしょう。

西谷正教授は、九州歴史資料館名誉館長や日本考古学協会会長を歴任した考古学の専門家ですが、伊都国から山陰へ石硯が移譲されたとする根拠はあいまいであり、石硯の威信財説は適切とはいえません。権威ともいえる専門家の事実誤認による説が日本列島における文字文化の普及が紀元前から始まったと見なさない原因になったように思われます。

中国史書や朝鮮の正史『三国史記』などから、3世紀以前から朝鮮半島の南部は、倭人の領域とされます。また、壱岐では出雲も朝鮮半島の土器も出土していますので少なくとも北部九州や出雲は、壱岐を通して倭人が頻繁に交流していたことは明らかです。

紀元前の文字文化の普及を確実に証明するには、文字が書かれた遺物が発見されるのを待たねばならないものの、糸島や唐津で紀元前から文字が使われていたとするならば、出雲でも同様に紀元前から文字が使われていたとみるべきでしょう。

3 中国大陆からの漢字の伝来

西谷正名誉教授は、北部九州から発見された石硯について「文字文化が弥生時代の伊都国で始まった可能性が高い」として文字文化発祥の地を伊都国と先進性を認めています。

しかし、「魏志倭人伝によると、邪馬台国は『七万余戸』とされる。その規模の候補地を探すと^{まきむく}纏向遺跡ではないか」として「邪馬壹国」を記した『魏志』倭人伝の行程記事を見れば邪馬台国近畿説を唱えています。『魏志』倭人伝には朝鮮半島から北部九州にかけての地名は出現するものの、近畿の地名は一切出てきませんから、邪馬台国近畿説を示す余地はありません。

紀元前1世紀以前の朝鮮半島では、百濟、新羅などの国が成立しておらず文字文化が発達していたかどうかは不明です。一方、壱岐のカラカミ遺跡では、中国大陆との交流を示す遼東半島系瓦質土器が出土し、その土器に「周」の文字が認められており、中国大陆から壱岐などを通じて漢字が北部九州に伝わったか、もしくは朝鮮半島の倭人を通じて楽浪郡から伝来したと考えるのが適切ではないかと思えます。

潤地頭給遺跡（糸島市）を始め、中原遺跡（唐津市）、東小田峯遺跡（筑前町）、中原遺跡（筑前町）、薬師ノ上遺跡（筑前町）、三雲・井原遺跡（糸島市）、吉野ヶ里遺跡（佐賀県）、西新町遺跡（早良区）、比恵遺跡群（博多区）のいずれも鑑定した、国学院大の柳田康雄客員教授（東アジア考古学、1943年～）は、福岡県教育庁文化財保護課長、九州歴史資料館副館長を経て、現在國學院大學文学部客員教授となっており邪馬台国畿内説です。

ただ、糸島出土の石硯について、西谷名誉教授が中国製の硯と主張するのと対照的に、柳田教授は、中国で見つかっている同時期の硯とよく似た特徴があったことから、「大陸

との交流を進めるため文字を使う必要があり、中国のすずりを模倣したのだろう」と述べており、倭人が中国の硯をまねて作ったと推察しています。なお、屈曲するラインが特徴的な遼東半島系瓦質土器は、紀元前3世紀から前1世紀のものとされます。

< 弥生時代の石硯出土位置図 (石田泉城作成) >

注. 雀居遺跡からは2～3世紀の杉板の文机が出土。



4 倭人伝と西新町遺跡の硯

邪馬壹國の時期と重なる古墳時代前期（3世紀半ば～後半）に使用されたとみられる、すずり5個が福岡市早良区西新6-1-10の西新町遺跡（現・福岡県立修猷館高等学校）から出土しています。この西新町遺跡は、上に示した石硯出土位置図にあるように博多湾岸にあり古代社会の交易拠点だったと考えられており、3世紀には各地との交流において広く文字が使われていた可能性を示唆している点で重要な遺跡です。

注目すべきは、この西新町遺跡から出土した、5個の硯の石片のうち3点から朱の痕跡が認められたことです。この朱の痕跡は何でしょうか。

習字では、線や点の位置や、とめ・跳ね・払いなどの筆遣いを朱墨で直されます。また、正しく書けたと認められた文字には朱墨で大きく丸をつけられました。また、古文書では、漢文の返り点や和文の句読点などを付す際や、添え書きに朱墨が使われることがあります。このように朱墨は、黒墨と色で区別することができるため、文字の修正や確認、あるいは注釈などを書き加えたりする際に用いられます。

とすると、『魏志』倭人伝には、「皆臨津搜露，傳送文書賜遺之物詣女王，不得差錯」（皆、津に臨んで搜露し文書を送って女王への贈り物に齟齬がないよう伝える）とあり、郡史などは皆、津(港)に臨んで送付物を点検して文書を伝送し、女王に詣でるときに賜った物に差錯がないようにします。この文書伝送の記事を鑑みれば、文書の読み書きがなされていた可能性は高いと考えられます。もし、西新町遺跡が倭人伝の津に該当するのであれば、石硯は、搜露の結果を文字で記していた物証となりそうです。

また、朱墨の使用は、贈り物の品々をしたためたリストの確認や、リストの誤謬の訂正や注釈の加筆、さらには確認済みのチェックの印をつけたりしたのではないかと推測され大変意義深いと考えます。

5 世紀の豊前国と穴門の国

一宮市 畑田寿一

筆者は先に河内王朝の誕生を探るため 5 世紀の日本列島各地の豪族の動きを論考してきたが、その中で瀬戸内海の西端の豊の国と穴門の国に注目し、九州王朝やヤマト王朝と違った半独立勢力が存在し、河内王朝の誕生に関わってきたとする説を述べてきた。

しかし、歴史を裏付ける証拠を示す段階のなるとはなはだ心許ない状況にある。この時代を語る通説は仲哀天皇から始まる説話や宇佐神宮創建の神話に近いものしか存在せず、信頼性に欠く部分が多すぎるからである。

今回は神話を一旦離れ、断片的ではあるが史実に近いと思われる事柄を繋ぎ合わせて当時の状況を推察してみたい。

< 穴門国地図 >



1 遺跡からみる穴門の国

(1) 下関市の遺跡

山陽新幹線の新下関駅建設に伴い発見された秋根遺跡や響灘側の綾羅木遺跡は、下関市が発掘調査した資料を参考にすると次のことが言える（文責：筆者）。

① 綾羅木遺跡

綾羅木遺跡は縄文早期から渡来人が住み着き、大陸との交流を物語る遺物が数多く出土している。弥生時代に入ると中心は海岸近くに移り稲作を行うようになり、穀物の貯蔵穴と思われる遺跡が 900 カ所以上発見されている。以降時代と共にいろいろな種族が移り住んできたが、5 世紀に入ると若宮古墳、仁馬山古墳などが造られ、再びこの地が繁栄す

るようになった。

場所的に朝鮮半島から沖ノ島を経由し日本海、瀬戸内海に抜ける中継点にあり、海洋氏族を中心に繁栄をしてきたと考えられる。

② 秋根遺跡

綾羅木川上流の砂子多川沿いの秋根遺跡は出土した石器から先土器時代に端を発すると考えられる。弥生時代には集落は南西 1 km の伊倉に移り、秋根地区は古墳時代まで衰退した。

5 世紀に入ると綾羅木遺跡とともに再び繁栄を取り戻し、領域は最大 30 万㎡におよぶと考えられる。出土する陶器からみると北九州とは異なる種類の物が混じり、独自の文化圏を形成していた。しかし、現在のところ王冠など王権を示す出土品は見つかっていない。発掘は全体の 1 割に留まっており、今後新しい発見に期待したい。

国府が定められた 7 世紀には一旦衰退するが、9 世紀に入ると再び多数の建物が建てられるが、生活臭が薄いことから官衙であった可能性が高い。

③ その他の遺跡

下関市には北部の中ノ浜遺跡や東部の木屋川上流の田部遺跡群などが存在するが、綾羅木を中心とした勢力とは別の勢力であったと考えられている。

(2) 銅の産地

北九州、山口県付近は石灰石に鉱石が嵌入したスカルン鉱床を形成しており、山口県では秋吉台付近の長登に銅鉱山があった。鉱山の起源は 7 世紀とされているが、付近の大切谷では縄文石器や弥生土器が発掘されており、香春岳の銅山とともに起源の見直しの余地があると思われる。

(3) 下関の豊浦宮

仲哀天皇が行宮とした「豊浦宮」は下関市長府町豊浦にあったとされている。しかし、当時この付近は海岸線が山に迫っており、目立った遺跡は少なく、在来豪族との関係を示すものは前記秋根遺跡しか無い。仲哀天皇を擁立する勢力を大内氏とし大日古墳を百済の琳聖太子とする説も存在するが出土品などが少なく断定は難しい。

5 世紀に入り瀬戸内海ルートが開拓されるに伴い、この地の重要性が増し瀬戸内海側に豊浦宮が造られたと考えられる。

(4) 須恵器の起源

須恵器は当初ヤマトの陶邑で造られ全国に広がったとされてきた。しかし、各地に初期須恵器が発見されるにつれ、同時伝来が考えられるようになり、現在では九州の朝倉とヤマトの陶邑が同時期で 5 世紀の初めに造られるようになり、その他の地域は 50 年から 100 年遅れて造られるようになったとする説が通説である。

その結果、山口県の遺跡の内、いくつかは 6 世紀の遺跡とされ今回検討の範囲から除外されることになったが、対象の遺跡の内、土師器と須恵器が同時に出土する遺跡があることが判明した。これは須恵器が 5 世紀に伝来したことを意味し見直しが必要であるが、未だ統一的な見解は出ていない。

なお、最近豊前の京ヶ辻遺跡（みやこ町）からは 5 世紀前半の須恵器工房が見つかっており、須恵器の起源に一石を投げ掛ける結果となった。

< 豊前国地図 >



2 遺跡からみる豊前国

豊前国の内、北側は秦氏を中心とした渡来系の色が濃い地域であり、南側側は大宰府―日田―中津ルート of 瀬戸内海への玄関口として栄えた。

中津市の垂水廃寺は 7 世紀創建とされているが法隆寺の建築様式で新羅系の瓦を使ったと考えられており、独自の仏教伝来ルートを持っていたと考えられる。

(1) 国作八反田遺跡

行橋市の同遺跡（3 世紀前半）からは銅戈^{どうか}が出土した。

(2) 鬼木四反田遺跡・河原田塔田遺跡

宇佐神宮の西の豊前市の佐井川流域に在る弥生遺跡（1～2 世紀）で、銅鑌を始めとした銅製品が多量に算出している。銅の国産化に関する通説から銅は輸入されたものと考えられているが見直しが必要になる可能性は高い。

(3) 川部・高森古墳群

この古墳群は宇佐市高森（宇佐神宮の北）に存在し、8 基の前方後円墳と 120 基の円墳などから成り、北九州では最大の規模を誇る。その内の赤塚古墳は 3 世紀末まで遡り、出土した銅鏡は椿井大塚古墳（京都）と同範である。免ヶ平古墳（4 世紀中頃）からは斜縁二神二獣鏡が出土し、中国との交易が伺われる。

赤塚古墳の出土品はヤマト王朝との関係が深く、免ヶ平古墳は朝鮮半島との関連から秦氏の勢力の拡大が読み取れる。

(4) 秦氏の存在

① 大宝 2 年豊前国の戸籍

上記の戸籍（702 年）から当地には秦氏・秦部の住人が異常に高い地域が存在することが分かっている。仲津郡丁里（福岡県行橋市）94 %、上三毛郡塔里 96 %、同郡加自久也里 82 %など全体でも 90 %近い集落が存在した。

607 年に隋の裴世清が九州に来た時、中国と同じ風俗をもつ「秦王国」の存在が『隋書』

に記録されているが、この地であった可能性が高い。

中心地と思われる京都郡苅田町の御所山古墳（5 世紀後半：119 m）からは銅製の馬の飾り（雲珠）が出土しており、朝鮮半島との関わりの深さを窺わせる。

石塚山古墳（3 世紀末）からは素環頭太刀が出土しているが、国内の他所に比べて 100 年程早く、朝鮮半島北部と親密な関係があった。

② 秦氏の渡来

秦氏の渡来は諸説あるが、応神十六年（5 世紀当初）葛城襲津彦の助けにより弓月君（融通王）が百済の 120 余県の民とともに渡来したとする説が最も有力である。秦氏はヤマト朝廷の保護のもと近畿地方に定住したとされているが、秦王国の状況をみると九州北部には更に古くから入植した可能性は高い。

(5) 香春岳の銅鉾山

香春岳の銅鉾山の記録は奈良の大仏建立のための発掘（740 年）以前には遡れなく、通説では銅の国産化は 7 世紀とされ、銅鐸、銅矛などの材料は全て輸入であったとされている。しかし、歴博の澤田氏は出雲市後野の銅山とともに 6 世紀後半まで遡る可能性を示唆している。また、『荒神谷遺跡と青銅器』（島根県古代文化センター編、同朋舎出版、1995 年）で久野雄一郎氏は荒神谷青銅器を島根県産であると主張されているが、一考に値する。

秦氏がこの地に住み着いた理由は銅の発掘以外に考え難い。時期的にも最低 4 世紀後半まで遡るのが妥当であり、銅鐸などの文化が廃れた後も銅の需要は高かったと思われる。

(6) 宇佐八幡宮の歴史

宇佐八幡宮の創建については説が乱立しているが、その中で総合的な検討がされていると思われる田村円澄・木村晴彦氏が著した『宇佐八幡と古代神鏡の謎』（戎光祥出版、2004 年）では次のように述べている。（文責：筆者）

- ① 香春岳三ノ峰には香春神社が祀られていた。主神は「辛国息長大姫大目命」で、香春の人々は新羅系の渡来人であり、その守護神が香春神社であった。

「息長大姫」は神功皇后を連想させる名前であるが、関係性は疑問視されている。

（注：筆者は主神を宇佐八幡の比売大神とする。ただし、宗像三神ではない。）

- ② 当時この地は「豊国」と「宇佐国」に分かれ、各々「香春神」と「宇佐神」が祀られていた。「香春神」が山全体を祀るのに対して、「宇佐神」は馬城峰（臼杵市御許山）に祭られ磐座祭祀が中心であった。
- ③ 6 世紀の初めの磐井の乱のとき宇佐氏は磐井に加担したため勢力が衰え、代わって秦氏系の辛嶋氏が宇佐の地に進出した。
- ④ 更にヤマトから大神氏が豊前国に進出し勢力争いが絶えなかったが、彦山で修業をしていた僧法連により仏教・道教を混在した「八幡神」を創設することにより一本化に成功した。
- ⑤ 現在、宇佐八幡宮が天皇家と渡来系の顔を持ち、比叡山との関係が深いのは以上の経緯によるものである。
- ⑥ 聖武天皇の代になり、「八幡神宮」と名付けられ辛嶋、大神、宇佐氏が交互に連携しあいながら八幡神を祀るようになり、大仏建立（740 年）に際して銅の産出と鑄造に貢献したことから国家と結び付けられることになった。

筆者には以上の説を論評できる知識を持ち合わせていないが、穴門の国と豊の国の関係をうまく説明しているように思える。

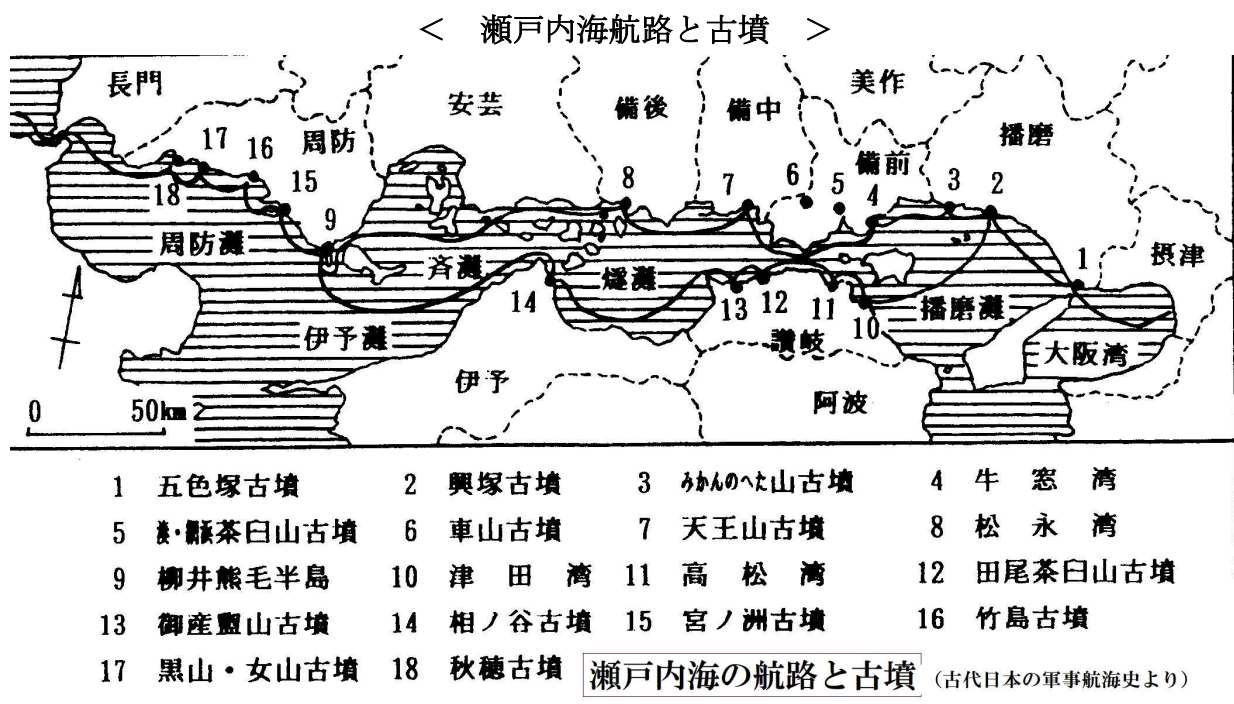
3 まとめ

以上、遺跡を中心に 5 世紀の豊前国と対岸の穴門の国を眺めてきた。

仮に香春岳の銅の生産開始を秦氏到来の時期とし、穴門の須恵器の製造を大和の陶邑と同時期とした場合、この地は次のような経過を辿ったことになる。

- ① 山口県の穴門は紀元前から幾多の渡来人が住み着いてきた。最初は日本海側の綾羅木川沿いに集落は造られてきたが、瀬戸内海交易ルートの開設に伴い山を越えた豊浦地域に進出した。この状況は後世国府が豊浦に置かれたことから推測できる。
- ② 一方、豊前地域は秦氏が入植して繁栄を極めた。随の時代にこの地を訪れた裴世清が「秦王国」と呼び、中国と同じ風俗であることを記している程であった。
- ③ 両者の繁栄の源は銅などの鉱物資源と交易であった。穴門は朝鮮半島、豊前は奄美地方などの南洋交易のヤマトへの中継地であった。
- ④ この地の文化の取り入れは早く、須恵器、仏教などの伝来は大和地方と同等か先んじていたと考えられる。
- ⑤ 瀬戸内海交易を通じてヤマトとの関係は深く、仲哀天皇などが地方豪族と結びつく下地は十分にあった。
- ⑥ 一方、宇佐八幡宮を擁する宇佐地方はすこし違う経過を経てきたと考えられる。当初は地方の一地域であったが、秦氏の南下により朝鮮半島の文化が色濃い地域になり、磐井の乱の頃にヤマトの勢力が侵入し、応神・神功天皇と宇佐八幡を結び付ける動きが加速した。更に後世、応神天皇の武勇伝と鎌倉幕府の思惑が絡んで現在の宇佐八幡神宮の性格が出来上がった。
- ⑦ 瀬戸内海は潮の流れが速く、潮待ちの港が航路に沿って散在した。当時未だヤマト政権はこれらの港を掌握できていなくて、息長氏など海洋氏族に依存する部分が多かった。当時栄えたと思われる箇所を繋いだ図を『古代日本の軍事航海史（中巻）』（山川出版社、1993 年）から引用させていただくと次の図のようになる。

以上の仮設の成立には前記の通説の見直しが必要であるが、見直し説は未だ市民権を得ているとは言い難い。しかし上記の仮設以外の説ではこの地域の 5 世紀における繁栄は説明ができない。今後の研究に期待したい。



3 種類の白鳳年号

瀬戸市 林 伸禧

1 はじめに

白鳳年号については、次の2種類が存在していると思っていたが、新たに、別系統の白鳳年号が判明したので報告する。

- ① 『二中歴』に代表される齊明七年～天武十二年（二十三年間）の第Ⅰ系年号
- ② 天武元年～天武十四年（十四年間）の第Ⅱ系年号

2 文献

- ① 『家伝上（鎌足傳）』（『群書類従』五輯）
- ② 『貞慧伝』（『続々群書類従』第三）
- ③ 『箕面寺縁起』（『図書寮叢刊』、旧九条家本）

3 新たに判明した白鳳年号の特徴（表1参照）

- (1) 孝徳紀の「大化」年号が掲載されていない。同様の年代記には『如是院年代記』の「細字年号」等がある。
- (2) 白鳳年号は、孝徳六年（650年、白雉元年）を元年とし、文武四年（700年）まで続く年号である。

すなわち、第Ⅱ系年号は、齊明・天智紀に古代逸年号が掲載されていない（『北鑑』倭国年号を除く）^{*1}が、この白鳳年号は齊明・天智紀及び文武元年から四年まで継続していることである。

4 1年のズレ

今回述べた「白鳳年号」の記事と『日本書紀』の記事との関係で1年のズレ、『続日本紀』では2年のズレがあり、今後の検討課題である。

5 第Ⅱ系年号の区分

- (1) 現在、確認出来た年代記等により区分すると表2（素案）のとおりである。
問題点としては、次の3点がある。
 - ① 白鳳から朱鳥に改元する時、その間に1～3年の空白期間が存在する年代記がある。
 - ② 朱鳥から大化に改元する時、その間に1年の空白期間が存在する年代記がある。
 - ③ 通常は、年号は空白期間がなく継続して通用されるものであるが、この空白期間が生じた理由について、合理的な説明がなされていた論考を寡聞にして知らない。
- (2) 前項で生じた原因は、筆者は次のような理由ではないかと考えている。
 - ① 九州王朝で用いられていた暦は、『日本書紀』で用いた暦と1年のズレがある。
 - ② 周の則天皇后は永昌元年（689年）11月に周正^{*2}を行なった。新羅も同様に周正を行っている。このような状況で、日本でも行なったと思われるが、判然としない。
ただ、持統天皇は持統四年（690年）正月に即位し、同年11月に「**奉勅 始行 元嘉暦 興 儀鳳暦**」とあるから、則天皇后が周正を行なった1年後の11月に周正を行なった可能性がある。

*1 『北鑑』倭国年号：齊明紀・天智紀に「白雉」年号が記述されている。

*2 周正：現暦の11月を年初（正月）とする暦。689年（永昌元年11月を載初元年正月）から700年までおこなわれた。

①周正施行後の月名：正月、臘月、1月、2月～9月、10月。

②新羅は695年から700年まで周正をおこなった。（『三国史記』新羅本紀第八）

古代逸年号年表

西暦	干支	天皇	治年	第Ⅰ系年号	第Ⅱ系年号	年 号		記 事		文献	
645	乙巳	孝徳 (大化元)	元	命長	6	大化	元				
647	丁未		3	常色	元	3					
649	癸酉		5		3	5					
650	庚戌		{白雉元}	6		白雉	元	白鳳	元		
652	壬子			8	白雉	元	3	3			
654	甲寅			10		5	5	白鳳五年歲次甲寅、随躬唐使到于長安 (則唐主永徽四年) 白鳳五年秋八月詔曰……	貞慧 家伝		
661	辛酉	齊明	7	白鳳	元		12	(白鳳) 十二年冬十月天皇幸于難波宮 (※紀1年ズレ)	家伝		
662	壬戌	天智	元		2		13	(白鳳) 十三年春正月御船西征 冬十一月天皇喪至自朝倉行宮 (※紀1年ズレ)	家伝 家伝		
663	癸亥		2		3	14	(白鳳) 十四年皇太子摂政 (※紀1年ズレ)	家伝			
665	乙丑		4		5	16	白鳳十六年歲次乙丑秋九月 經自百濟來京師也 白鳳十六年歲次乙丑十二月廿三日 春秋若干 率 大原殿下	貞慧 〃			
668	戊辰		7		8	19	摂政六年春三月遷都于近江國 (※紀1年ズレ)	家伝			
669	己巳		8		9	20	七年正月即天皇位 是爲天命開別天皇 (※紀1年ズレ) 然間至于廿五 時白鳳廿年歲次庚午春三月十七 日 攀躋于当山 随從于澗流 踰山濟川 漸図上時 往々所見致有々滝三所也 (※紀1年ズレ)	家伝 縁起			
670	庚午		9		10	21					
671	辛未	10		11	22	以白鳳 ^イ 廿二年歲次辛未正月八日 登于金峯山 同年四月十七日夜同年十月十七日甲午	縁起				
672	壬申	天武	元		12	白鳳	元	23			
683	癸未		12		23	12	34				
684	甲申		13	朱雀	元	13	35				
685	乙酉		14		2	14	36				
686	丙戌	15	朱鳥	元	朱鳥	元	37				
687	丁亥	持統	元		2		38				
694	甲午		8		9	45					
695	乙未		9	大化	元	46					
697	丁酉	持統 文武	11 元		3		48	以同四十八年歲次丁酉二月十日 流遣伊豆嶋 生年六十五也 (※統記2年ズレ)	縁起		
700	庚子	文武	4		6		51	同五十一年歲次庚子二月廿五日 …召出於行者 擬殺之時敢以不詎 勅使之前蹲居傾首請殺 但是 取殺刀 両肩」面背等再三厭擬舌抵之 後返与使 言 神裁无愆 頗蒙重々勅勘 實是可然 只早可殺 勅使取刀見之 有文写尋検 是當慈明神表文也	縁起		
701	辛丑	文武	5	大宝	元	大宝	元	大宝	元	大宝元年歲次辛丑正月一日 行者酸鼻言 別天下 欲遁 因磬擬於故参詣權現之前 自手打磬擬渡唐 意趣手心 敬白之 宇時生年六十八也	縁起

表2

第Ⅱ系年号区分（素案）

2			1												区分 天皇						
2		1	5		4		3					2				1					
2	1		2	1	2	1	5	4	3	2	1	3	2	1							
							大化								大化	1 5	孝徳				
白雉		白鳳					白雉								白雉	6 10					
		白鳳													白雉	1 7	齊明				
		白鳳													白雉	1 10	天智				
白鳳	朱雀	白鳳			白鳳	白鳳朱雀					朱雀			白鳳	1	天武					
白鳳	白鳳					白鳳	白鳳	白鳳	白鳳						白鳳			2 12			
																				13	
朱鳥	朱鳥					朱鳥	朱鳥	朱鳥					朱鳥					朱鳥			朱鳥
		白鳳			朱鳥		朱鳥						朱鳥			朱鳥	1 7	持統			
							大化(3)	大化(3)			大化(4)			大化(4)			大記(6)		大化(4)		8
								大化(4)	大化(3)			大化(4)			大化(4)						
		白鳳																	10	文武	
						大化(4)								1							
																		2			
																			3		
																			4		
大宝															5 7	事例文献					
仁寿鏡	如是院年代記（細字）	家伝上（鎌足傳、貞慧伝、箕面寺縁起	日本書紀	重撰皇統編年合運図（本文）	万葉緯（往古年号・傍注）	指掌和漢合運図	日本皇帝系図	皇年代略記	皇代略記	皇代記	皇年代私記	皇年代記（冷泉家・日本記）	皇代曆	水鏡 扶桑略記	北鑑（倭国年号）						
								繰下げしている	持統紀に年号が												

※年号が掲載されている期間：□

名古屋市営地下鉄鶴舞線「いりなか駅」から愛知サマーセミナー会場までのアクセス



前回の例会の内容

■ 応神天皇と仁徳天皇の時代

一宮市 畑田寿一

九州とヤマトの2大経済圏の接点部分に豊の国が半独立した勢力を持っていた。いわゆる河内王朝はヤマト経済圏の1つの政治形態であったと考える。

■ 『襲国偽僭考』以前の「九州年号」文献
瀬戸市 林 伸禧

鶴峯戊申著『襲国偽僭考』以前に古代逸年号の存在を示した『寺社考』と『臼杵小鑑拾遺』の文献があった。

■ 帯方郡治は沙里院にあった
姫路市 野田利郎

智塔里土城が帯方郡治の跡と考えられ、その近くには古墳群が認められるとともに「帯方太守張撫夷傳」の煉瓦が出土しており帯方郡治は沙里院にあったと考えられる。

会員の投稿について

■ 会報誌への投稿 (編集担当: 石田)

furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

■ 投稿締切り日 7月26日(金) 厳守

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡不要、遅刻・早退もかまいません。例会で発表する場合には資料を25部用意ください。

例会の予定

■ 例会の予定

1 日時 7月6日(土) 13:30~(第4)

2 場所 名古屋市市政資料館 第5集会室

名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051

3 参加料 500円 (会員は不要)

4 交通機関

(1) 地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分

(2) 名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分

(3) 市バス「市政資料館南」、北徒歩5分

(4) 市バス「清水口」、南西徒歩8分

(5) 市バス「市役所」、東徒歩8分

5 駐車場 市政資料館: 12台+α 収容(無料)

■ 来月の例会 8月11日(日)

愛知サマーセミナー

■ 会員は、12:30に4F教室前集合

日時: 7月14日(日) 13:10~

3限(13:10~14:30) 講座番号G142

4限(14:50~16:10) 講座番号H130

場所: 南山高等・中学校 男子部の東校舎

4階 中教室1

- ・地下鉄「いりなか駅」下車, 西へ徒歩3分
- ・公開講座、会費不要
- ・会場の駐車場無し
- ・4Fまでのエレベーター有り